シリーズ 城

第七十九回

久下田城

―「関東に貴殿の功名隠れなし」と家康に言わしめた猛将の城―

山本 忠博

今回ご紹介するのは、茨城県筑西市に在る久下田城です。この城を築いたのは、水谷正村という人物です。出家後の蟠龍斎という名の方が通っているかもしれません。とはいえ、蟠龍斎の名も、一般にはそうは知られていないでしょう。その名を知っている方は、相当な歴史通です。

彼は、下総国の結城城（茨城県結城市）を本拠とした結城氏の家臣で、結城四天王の一人に数えられています。知勇兼備の猛将で、結城領の主に東側と北側の方面を担当していました。外交を含めた政治家としても有能で、早くから徳川家康とよしみを通じていたので、上述の家康の言葉が残っているわけです。

まずは主家の結城氏のことから

結城氏の先祖は、平安時代の平将門の乱を収めた藤原秀郷だとされています。秀郷を祖とする点では、第73回の唐沢山城の佐野氏や、奥州藤原氏と同じです。

そして、結城姓を用いた初代は、鎌倉幕府の源頼朝の側近で、頼朝や、それに続く執権の北条氏の信任も厚い、有力な御家人でした。

室町時代には、結城氏は下総国の守護となり、鎌倉公方（室町幕府の東国支配の長官）を補佐する関東八館の一人にもなっています。関東八館といえば、第51回の小田城で紹介した小田氏や佐竹氏と同じです。

室町時代中期の室町将軍家と鎌倉公方の争いの過程で、結城合戦（1440年）が起こり、結城氏は、室町将軍家に敵対した結果、鎌倉公方とともに一度滅亡します。その後、鎌倉公方の復権にともなって結城氏も再興して、戦国時代へと向かっていくことになります。

水谷氏について

水谷氏も、藤原秀郷を祖とする一族だとされます（異説あり）。室町時代前期の頃から結城氏に仕え始めて、結城合戦では主家に殉じて没落しますが、主家の再興にともなって下館の地をたまわり、下館城（茨城県筑西市）を居城としました。そして、下館城での六代目が、前出の水谷正村、蟠龍斎になります（以降は、「正村」で統一します）。

水谷正村について

正村は、1524年にこの世に生を受けました。左目の瞳孔が二つあったといい、16歳で初陣に出たところ、46の首級をあげたといいます。ちょっと話を盛りすぎている気もしますが、若い頃から傑物だったのでしょう。そんな正村を主君は重用し、自らの娘を嫁がせて姻戚関係を結んでいます。

結城氏と、その北の同じ元関東八館の宇都宮氏との関係が悪化し始めると、正村は、下館城を歳の離れた弟に任せて、宇都宮領に近い地に久下田城を築いて城主となりました。久下田城は、伝承では、藤原秀郷が将門追討の際に築いた上館、中館、下館のうちの上館の在った所だと言われています。ちなみに、下館城は下館に当たると伝わります。

宇都宮氏の攻撃を跳ね返す

宇都宮氏は、結城領を奪うべく、1546年に久下田城に向けて兵を発しました。これを察した正村は、すぐさま主君に急を告げました。

ところで、正村が優秀な人物であったことは既にご承知と思いますが、正村が生涯で仕えた結城家当主の三代もなかなか優秀な方々で、没落していく関東の名家が多い中にあって、結城家を、小なりとはいえ戦国大名化させ、かつ存続させることに大きく貢献した人達なのでした。

そんなわけで、正村からの急報を受けた結城家当主も、素早く動き、すぐさま援軍を久下田城に送り込みました。主君の迅速な行動で兵力を得た正村は、宇都宮勢の襲来前に作戦の準備を整えることができました。

そこに宇都宮勢が襲いかかり、緒戦で久下田勢を退かせます。とはいってもこれは正村の計略で、宇都宮

勢が城の周囲の沼地を越えたところで伏兵がその背後を突きました。宇都宮勢は逃げ惑い、沼地にはまるか、久下田勢に討たれることとなり、司令官は討ち死にし、命が助かった者も武器を捨てて命からがら逃げ帰るのみとなりました。

この戦いでの宇都宮勢の戦死者は800余りで、久下田城側の被害は百人ちょっとだった伝えられています。

久下田城下について

久下田城は下館城の支城でしたが、その規模は大きく、本城並でした。そして、戦上手の正村は、優れた民政家でもありました。城下に仏閣を建立し、白木綿や、宇治から取り寄せたお茶の栽培を薦めて、城下の発展と民の生活の安定を図りました。そして、正村の建立した仏閣は、宇都宮氏との戦いで伏兵をおく場所になりました。

正村の隠居と、続く奮闘

正村は、1569年に家督を弟に譲り、出家して蟠龍斎と名乗りました。形の上では隠居ですが、正村の奮闘はまだ続きます。このころの最大の脅威は、関東の南から勢力を伸ばしてきた新興の後北条(ごほうじょう)氏でした。正村は、後北条氏に対抗するために、佐竹氏や徳川家康等と連携することを図りました（ただし、反後北条一色というわけでなく、臨機応変に後北条氏についたりしています。ここが難しいところ……）。

連携を図るべき者が増えるとほころびも出るもので、連携から外れる者も当然出てきます。その外れた者が結城家の家臣にも触手を伸ばして来ました。そして、羽石盛長という結城家の傘下の武将が、その誘いに乗って結城家に反旗をひるがえしました。

これは、1585年のことで、正村は60歳を超えているわけですが、羽石の籠もる田野(たの)城（栃木県益子町）に猛攻を加え、最後は羽石盛長と一騎打ちをして、これを下したと伝わります。

その後の正村と久下田城

1590年の豊臣秀吉による小田原征伐で、結城氏の脅威であった後北条氏は滅亡しました。豊臣政権下では、水谷氏は、結城氏の与力とはいえ独立した大名と見なされ、後の江戸幕府での下館藩の基礎をつくりました。

その後の正村は、久下田城で過ごし、そこで1598年に生涯を全うしました。そして、久下田城は、1615年の一国一城令で廃城となりました。

その後の結城氏と水谷氏

結城氏は、小田原征伐後に、家名を守るために秀吉と家康に接近し、秀吉の養子になっていた家康の次男の秀康(ひでやす)を当主に迎え入れました。この辺の政治力は大したものです。ただ、これで結城の家名は安泰と思いきや、秀康が、関ヶ原の戦い（1600年）の後に越前（現在の福井県）に移ってから松平(まつだいら)姓（徳川一門の姓）を用いたために、結城の家名はなくなってしまいました。

水谷氏は、関ヶ原の戦いでは徳川につき、戦後下館3万1千石を安堵され（後に4万7千石に高直し）、結城氏の与力からも外れて完全に独立した大名となりました。その後は、備中(びっちゅう)国（現在の岡山県西部）に5万石で移って、備中松山城を現在の形に再建しました（第47回備中松山城参照）。徳川幕府の覚えめでたく、外様大名から譜代大名に列せられています。しかし、残念ながら宗家筋の後継者が絶えて大名家としての水谷氏は断絶してしまいます。ただ、その一族が、旗本として明治維新まで家名を保つことができました。

現在の久下田城

真岡鉄道久下田駅から徒歩で十数分程度の所にあり、現在は茨城県の県指定文化財（史跡）になっています。かつての二の丸が城趾公園になっており、空堀等が見られます。ただ、城域の多くは、基本的に個人所有の土地になっているようですので、訪れる際は、それなりのご配慮をお願いします。

久下田城の俯瞰（筑西市教育委員会提供）

空堀（筑西市教育委員会提供）